

Q. 提出された課題にフィードバックしたり、遠隔授業で質疑応答する際、教員の負担を過度に増やさず、しかし、学生にとっては十分に実施できるようにするためには、どのように工夫すればよいと思われますか？

**【教育学部 金馬 国晴先生】**

個人のページでも述べましたが、授業支援システムの「ディスカッション」機能を使えば、学生が相互に見られ「返信」コメントも書き込めるため、教員としては彼らのやりとりに任せることとし、コメントは全員それぞれに対してでなく、学生たちに混じってたまに書き込むにとどめました。教員から評価を受けるためとか、教員の意見が常に正しいとかという一方向のレポートにしないため、複数の友達からの多面的なコメントこそためになると感じてもらう意図もあります。

**【経営学部 高井 文子先生】**

授業内でなるべく質問を出してもらい、共有する、ということでしょうか。例年出そうな質問について問いかけをしたり、授業中の内容的な区切りなどで頻繁に声かけをしたり、あるいは、なるべく質問しやすい雰囲気（全員に対してではなく、教員個人だけへの質問も歓迎）にして、それを拾って返答するということが挙げられると思います。また、先にも述べましたが、オンデマンドとして動画を残すことは、授業内容の繰り返しの質問を防ぐことになると思います。

**【理工学部 伊藤 傑先生】**

講義科目では、予習問題の解説を次回授業時に行うことで、予習の段階で正答率が悪かった問題を丁寧に解説することができています。

また、実験科目では、LMSで提出されたレポートに対するフィードバックとして、各課題（小問）に対していくつかのコメント文例を用意しておいて、それらを組み合わせたコメントを返却するようにしています。ある程度時間はかかりますが、紙媒体のレポートを採点していた頃と比べると、少ない負担で多くのフィードバックを行えるようになりました。

**【理工学部 竹居 正登先生】**

課題へのコメントについては、各科目の各回ごとに解答文例をストックしていき、適宜組み合わせたり調整するなどして貼り付ける形をとっています。また、非常に多い間違いや質問については「講評・補足」等のプリントにまとめる場合もあります。私の場合、講義への感想・質問以外についても感想欄に書けるようにしているので、今後は講義内容に

関するものは全体への返答を主とし、個別にはそれ以外の感想・近況へのフォローを主とするようシフトする方がいいと感じています。

#### 【都市科学部 藤原 徹平先生】

課題全体できちんとした理論の体系をつくる必要があります。  
フィードバックは学生相互でできるように優秀な課題作品を公開することが重要です。

#### 【国際戦略推進機構 中川 健司先生】

個別にフィードバックしなくてもいい課題については、画面共有機能等を使って、クラス全体で回答を共有しながら解説しています。その方が自分の回答だけでなく、ほかの学生の回答も参考にすることができると考えているからです。

#### 【国際戦略推進機構 新沼 雅代先生】

緩急をつけてメリハリをつけることだと思います。一般的に授業では課題が複数回出題されると思いますが、一人一人にフィードバックするのは非常に時間がかかります。遠隔では添削だけでなく、さらに添削結果を PDF 等にして LMS 上で学生毎にアップロードする作業もあります。講義の準備と質疑応答などのフォローをいかに早く終わらせてフィードバックの作業時間を確保できるか重要だと思いました。授業の「型」（ルーティン化）を決め、授業構成に毎回悩まないようにしたことも効果があったと思います。講義内容に関する質疑応答については、できる限りその授業内か少なくとも授業終了 2 時間以内には回答し、この時間帯以降および土日は回答しないようにしました。即時回答を続けるうちに学生もこの時間帯に質問してくるようになりました。この時間帯はかなり忙しくなるのですが、意識的に時間を区切ることで、教員が四六時中 LMS を気にしなくてもよくなります。学生も「この教員はだいたいこのタイミングで回答をくれる」ということが分かってきて、回答をずっと待たないでよくなります。

この他にやった工夫は質疑応答内容の共有です。例えばあるクラスで質問が出てそれに回答したとします。回答には補足の資料を付ける場合もあります。その回答内容や資料を LMS の FAQ や掲示板、あるいは新しく授業欄を立てたりして、できる限り早くそのクラスで共有します。同じ科目を複数担当している場合は、他のクラスの授業に先んじて LMS に載せてしまいます。こうすることで学生から同じ内容の質問が来ることを回避できます。より重要なことは、このような質問が今後出ないように、既存の講義内容をより分かりやすいものに改善しておくことです（PDCA サイクル）。必要に応じて資料や音声等もアップデートして、別ファイルで保存しておきます（私は勝手に「精緻化」と呼んでいます）。他のクラスの講義に間に合えば、資料や講義音声を新しいファイルと丸ごと差し替えてもい

いですが、学生の中には資料等をすでにダウンロードしてしまっている者もいます。ダウンロードしたタイミングによって学生が持っている資料が異ならないように、LMS で資料のタイトルを「【訂正版】第〇〇回」のようにして分かるようにしておきます。ファイル名も（もともと「第〇回 01」だとすれば）「第〇回 02」のようにして別途追加しておくほうが良いと思います。小さな工夫なのですがこれも私の「型」の一つです。

#### 【国際戦略推進機構 長谷川 健治先生】

個人的には、毎回ミニ課題を課して、フィードバックを授業内で実施することがやりやすいと感じています。

#### 【国際戦略推進機構 渡辺 雅仁先生】

15 名以下の少人数で実施できないと、フィードバックは難しいですね。ただ、LMS の授業状況で未評価の課題については毎週必ず評価するように心がけるだけで、学生の状況把握とともにある程度のフィードバックは 30 名以上のクラスでも可能です。

#### 【大学院教育強化推進センター 市村 光之先生】

毎回の小レポート：

私の担当する科目では、毎回の授業アンケートの一環として、小レポート（授業から考えたこと、400 字程度）を授業支援システムから提出させています。いわゆるミニッツ・ペーパーですので、評価点はつけずに提出の有無のみで評価しています。次回授業の冒頭で前回授業のフィードバック（5 分程度）をします。その際、3~5 名の小レポートを抜粋で紹介し、口頭で簡単にコメントします。取り上げるレポートは、学生が授業内容を多角的に・より深く理解する助けになるもの、誤解があり補足説明が必要なものの 2 種です。こうした簡単なフィードバックでも毎回実施することで、履修生はモチベーションを切らさずに小レポートを書いてくれます。期末には独自の詳細アンケートを実施していますが、多くの学生は「適切なフィードバックだった」と回答しています。

中間・期末レポート：

中間・期末レポートなど評価点を付ける課題の場合、評価の標語のみを付け開示することが多いです（履修生が少いときはコメント 2~3 行も付けます）。評価基準としてレポート評価用のルーブリックを学生に事前に公開します。コメントがなくても最低限、どこがよかったかよくなかったかがわかるよう、総合評価、内容：論点・具体性、論理性：構成・論拠、表現に分けて評語を付けています。また、提出期限後 1 週以内に評価を終え、次回授業では 5 分程度で全体の講評をします。評価の分布を示し、典型的な改善点について説

明しています。詳しく丁寧とは言えませんが、学生は自分の評価の位置付けを把握でき、レポート改善の指針が得られます。

遠隔授業になって以降、課題負担が問題になりましたが、学生たちのストレスは量だけでなく、フィードバックがないこと（自分のレポートの出来がよいのか、よくないかわからない）です。フィードバックは個別に、詳しく実施することに越したことはないと思いますが、上記のように、大切なのは①基準を明確に、②早く、③改善ポイントを具体的に、の3点ではないでしょうか。殊に履修対象が1年生の場合は、大学でのレポートに慣れていませんので③は詳しく説明します。